

『伝える力』を高める授業の工夫

～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

桑畑 秀子 大矢 裕子 高杉 廣張 石井 敬

1 主題設定の理由

平成20年3月に新学習指導要領が告示され、24年度からの完全実施に向け、今年度はその移行期間に入った。外国語科（英語）については、コミュニケーション能力の育成を目指すという基本的な方向に変わりはないが、10年あまりの間に明確になってきた様々な課題に対応するため、週あたりの時間数の増加や言語活動および言語材料などにおいて、より充実した内容となるような改訂が行われた。

本校英語科では、研究主題を『伝える力』を高める授業の工夫～伝えることへのレディネスづくりを意識して～とし、設定した課題あるいは活動に対して、日々の授業や“帯プログラム”等を通して学んだ事柄、獲得した知識・技能等を生徒自身がかかわらせ、自らの考え、思いなどを伝えることができるようになることを目指した研究を推進してきた。本研究主題設定の発端は、伝える内容をきちんと持ち、伝える相手が目の前にいるにもかかわらず、声は小さく、話し手のペースで一方的に伝えようとする生徒の実態を何とかしたいという教師の強い思いからであったが、同一主題で4年（サブテーマを改めてからは1年）を経過する中で、徐々に所期の目的を達成することができるようになってきた。

加えて、これまでの研究並びに実践は、新学習指導要領が改善の基本方針とするところの一つ

自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」やコミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成を重視する観点から、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等について、自らの体験や考えなどと結びつけながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、4技能を総合的に育成することを重視する。

と方向性を同じくするものであることが見えてきた。

今後、本校英語科の研究実践と新学習指導要領のねらいとのさらなる接点を模索しながら、教科内の議論と授業実践を積み重ね、研究に努めていきたいと考え、本研究主題を設定した。

2 全体研究との関わり

全体研究主題「知の再構成を目指して～「かかわり」を生かした学習過程の工夫～」では、単元や教材の中に潜む「かかわり（学習内容の関連性）」に教師自らが着目し、作業、討論、実験、小集団活動など教科の特性を生かした学習過程を工夫することで生徒自身にその「かかわり」を見出させ、そこから得たもの・感じことを生徒自身の中で再構成し、より確かな理解や感得へとつなげていくことを目指すものである。それを受けて英語科では、「かかわり」を次の3点のようにとらえている。

① 既存の知識・技能等および伝えることへのレディネスと表現したいこととの「かかわり」

中学校入学以来の英語学習を言語材料の点から見てみると、2学年の後半頃から表現の幅に広がりが出始める。1学年では現在時制をもとに「事実を述べる」ことが表現活動の中心であるのに対し、2学年の前半になるとそれに過去や未来時制が加わり、時制を中心とした表現が広がる。さらに2学年の後半では、I think～. を用いて自分の考えを述べたり、不定詞やbecauseを使って理由を付け加えることを学習する。これによって表現のヴァリエーションは大幅に広がってくる。

教科書では、これらの言語材料をひとつのUnitを通して、あるいは3年間を通してスパイラルに導入したり提示したりしているが、生徒の頭の中には一つの言語材料、あるいは一つの表現方法として単発的にインプットされがちである。それだけに、既存の知識や技能を生徒自らが再び引っ張り出して用いることができる課題や活動を時機をとらえて仕組むことは点在する知識同士をつなぎ合わせて再構成させる、あるいは、学習した言語材料や表現方法がコミュニケーションの手段として実際に使えることを実感させる意味において、その果たす役割は大きいと言える。

また、コミュニケーション能力の育成には、基本的な言語材料についての理解や定着のための練習が欠かせな

い。表現能力の基礎を作るドリルや音読、暗唱など地道で継続的な練習活動が伝えることへの準備状態を生徒の内面に生みだし、表現したいことを話したり書いたりするときのペースとなることに気づかせたい。

②「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の4技能相互の「かかわり」

コミュニケーションにおいては、メッセージの送受信が不可欠である。例えば、Aが新聞の広告から得た情報をBに伝える場合、Aはまず情報を「読み」、それをBに「話す」。あるいは、Bに間違っただけの情報を提供しないために、Aはメモを「書き」留めておくかもしれない。BはAの話す内容を「聞く」ことで自分も情報を得ることになる。このように、AとBの間で4技能が相互補完的にかかわり合うことによって、コミュニケーションは成立していることがわかる。

平素の授業では、ここではリスニング活動、ここからは本文の内容理解、その後は音読練習といった具合にそれぞれの技能にスポットを当ててバラバラに指導しがちであるが、年間を見通して、あるいは3年間を見通して、4つの技能を総合的に用いる活動や場を設定し、コミュニケーションにおいては4技能が必然的に「かかわり」合っていることを見いださせ、実感させたいと考える。

③モデルと自分自身との「かかわり」

英語科では、『伝える力』を高める活動を仕組む際には必ず、最終目標・最終の姿（ゴール）とそれに至る道筋を生徒に示すことにしている。

ゴールに至る道筋を示すのは、現在学習していることが次の段階へどのようにつながっていくのかを生徒自身がわかっていることで毎時の振り返りを次時に生かすことが可能となり、生徒が自分自身の学びを見取ることができるようにするためである。また、モデルを示されることにより、生徒は最終の姿に対するイメージを持って活動に取り組むことが期待できる。

モデルとするのは教科書そのものであったり、教科書をもとに教師がアレンジしたものであったりと活動内容や課題によって異なるが、モデルの提示に際して配慮すべきことは次の3点である。

- 教科書をベースに、生徒の興味関心や知的好奇心を揺さぶるものであること。
- 学習したことを用いれば課題や活動をクリアすることができるということに気づかせ、意欲を持って、生徒自身が成果を実感しながら取り組めるものであること。
- モデルの中に自分を置き、自身の経験、考え、思いなどを表出できるものであること。

以上のように、与えられた課題や活動に対して、生徒が、学習した事柄や既存の知識・技能等と、モデルとそして自分自身とを持ち込んで試行錯誤を繰り返す過程は、まさに生徒が知を再構成している時である。そして、その時をとらえて教師が適切な指導・支援やフィードバックを与えることによって、さらにはそこに至るまでの段階的指導や学習過程を工夫することによって、「かかわり」は生徒の内面にさらに深く根付き、生徒の『伝える力』はその内容においても伝え方においても、豊かで広がりのあるものになると考える。

3 これまでの研究経過と今後の研究の視点

研究を推進するにあたり、キーワードとなるのが『伝える力』と「伝えることへのレディネスづくり」の2つである。

まず、本校英語科が目指す『伝える力』とは、

身の丈にあった英語を用いて、自分の言いたいこと、考えや気持ち等を話したり、書いたりするなどして伝えることができる力

である。本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、次表に示すように『伝える力』を生徒の実態に合わせて6つに分類し、それぞれの『伝える力』を高めることを目的とした活動・課題の開発に研究の主眼を置いた。

	『伝える力』の分類	活動および授業実践例
1	聞き手に十分に伝わる声の大きさを音読したり、英語を話すことができる力	○日々の授業、音読練習 ○Try Shopping at a Burger Shop. (H20. 大矢・石井)
2	スピードや抑揚、間などを大切に、音読したり話したりすることができる力	○A Mother's Lullaby ～気持ちを込めて音読しよう～ (H18. 桑畑) ○英語で紙芝居に挑戦 ～A Magic Box～ (H18. 石井)
3	伝えたい内容に見合った身振り・手振りや実例・実物などの提示を交えて、聞き手を意識した効果的な発表をすることができる力	○Let's send a video letter to Aisha. ～日本を語ろう～ (H17. 石井) ○Let's Make a Presentation. ～調査をして、意見を発表しよう～ (H18. 桑畑) ○Let's make a speech! ～好きな場所を紹介しよう～ (H20. 桑畑)
4	教科書の基本文や本文で使われている表現などをモデルとして、既習の学習事項や語句・語彙をできる限り用いて、伝えたい内容を話したり書いたりすることができる力	○夏休みの思い出を語ろう (H18. 石井) ○各地の観光地を紹介しよう! (H19. 上野) ○私の日本文化紹介 (H20. 上野) ○ミーナに手紙を書こう! (H21. 桑畑) ○冬休みについて語ろう (H22. 高杉)
5	知っている語句や優しい表現を用いて説明したり言い換えることによって、聞き手や読み手の理解を助けることができる力	
6	文の配列や順序性を吟味して、伝えたい内容を話したり書いたりすることができる力	○My Dream ～夢を語ろう～ (H17. 桑畑) ○“3 Hints Quiz”をヴァージョンアップしよう! (H19. 桑畑)

しかし、分類したとおりに明確な線引きをすることは難しく、例えば、“Try Shopping at a Burger Shop.”の実践は1年次の9月実施ということを考え、1の『伝える力』を高めることを一番の目的としたが、実際のところは2や3の『伝える力』も併せて伸長するのに効果的な活動となった。他の実践においても同様なことが垣間見られ、ある『伝える力』が他のすべての『伝える力』のベースになっていたりと、それぞれの『伝える力』が相互にかかわり合っていることを強く実感することとなった。そこで、『伝える力』を“自分の身の丈にあった英語、すなわち、教科書本文の表現や教師が示すモデルを活用し、各学年で学習した文構造、語句・語彙、慣用表現等を正しく用いて、自分の言いたいこと、考えや気持ち等を伝えることができる力”と定義づけ、その力の育成を目指した課題や活動を開発することと、その活動・課題に「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を様々な角度からかかわらせて最終ゴールにたどり着くような学習過程を工夫することの2点を研究の中心に位置づけたいと思う。

さて、もう一つのキーワードである「伝えることへのレディネスづくり」であるが、『伝える力』を高める過程において大事な役割を果たすのがこの「レディネスづくり」にあるのではないかと考え、昨年度からサブテーマに掲げて教科研究への切り口とした。レディネスとは、生徒全員が次の学習活動に無理なく入ることができ、所期の目標を達成できる状態を意味する(高橋一幸氏 2003)もので、その状態を生徒の内面に作り出す手だてとして、毎時の授業に“帯プログラム”を設定し、トレーニングや反復練習、継続的な活動等を通して表現するための基礎・基本を培うことを目指した。その結果、いざ表現する場面に出くわした時、生徒は“帯プログラム”で身につけた知識や技能を持ち出し、自分の伝えたいことを表現するためにそれらを活用しようとする姿を見て取ることができた。音読から自己表現へつなげることを目的としたReading Marathon、コミュニケーション活動や自己表現につながる語彙・フレーズ等を耕すためのBINGO、学習事項の復習と文構造の定着を図ることをねらいとしたDictation、人前で話すことに慣れさせるためのスピーチ等いずれもわずか5分程度の活動であるが、毎時繰り返し継続することの効果は大きい。表現活動と日常とをつなぐのに役立つものを1学年から3学年まで系統立てて“帯プログラム”に位置づけ、その有効性をさらに探っていきたいと考える。

また、知識・技能面のレディネスを備えさせることと同様に、心理面、気持ちの面でも準備状態を生徒の内面に作り出して表現活動に臨ませることは「伝えることへのレディネスづくり」には欠かせない。勿論、“帯プログラム”もその役割の一端を担ってはいるが、心理面のレディネスづくりは学習過程にどんな仕掛け・工夫を施すかに因るところが大きいと考える。そこで昨年度は、小さなハードルを一つ一つクリアさせ、自信と意欲を持って次の段階へ進むことができるような段階的指導を取り入れることや、活動形態を4人一組とし、練習が終わるごとにお

互いにアドバイスをしあい、最終ゴールに向けて今どういう状態にあるのか、またどのように改善していくことがより良いものへ近づけるかを考えさせること、上達していることを実感させるために、練習段階において最初と最後の練習相手を同じにすることなどを行った。こうすることで、生徒は表現することへの安心感を持つことができ、それが発表の際の自信につながっていったのではないかと感じている。

さらには、表現するための前段階として、「聞く」、「読む」などの他技能と関連づけて「話す」あるいは「書く」ためのヒントとなるキーワードを引き出したり、イメージづくりをさせることで、生徒の内面に心理的な部分でのレディネスを作り出すことができないかを模索していきたいと考えている。

4 研究仮説

“帯プログラム”によるトレーニングや反復練習等で伝えるための知識・技能等を身につけ、段階的な指導や学習過程の工夫、適切な支援・フィードバック等で伝えることへの心理的な安心感や自信を育てるならば、それらが生徒の内面で伝えることへのレディネスとなり、本校英語科が目指す『伝える力』高めることができるであろう。

5 研究内容

- (1) 『伝える力』を高めることをねらいとした活動や課題を開発する。
- (2) “帯プログラム”でできることのアイディアを出し合い、実践を通してその有効性を探る。
 - 基礎・基本を培うためのルーティーンワーク的な“帯プログラム”の内容とその実践
 - 活動（課題）に必要な事柄をトレーニングするための“帯プログラム”の内容とその実践
- (3) 活動（課題）のゴールに至るまでの指導計画や毎時の学習過程の工夫が生徒の『伝える力』の伸長に及ぼす効果を検証する。

6 本年度の研究内容

- 1 学年から3 学年までの系統性を持たせた“帯プログラム”の在り方を探る。
- 「聞くこと」、「読むこと」を「話すこと」、「書くこと」とかかわらせた学習過程を工夫し、『伝える力』の育成にもたらす効果を探る。
- 授業実践を通して、成果と課題を明らかにする。

7 実践例

実践1 中等公開研究会より

1. 単元名

Let's Write a Letter to Meena! ～ミーナに手紙を書こう～
(NEW HORIZON English Course 3 Unit 3 Our Sister in Nepal)

2. 本授業のねらい

本校英語科の研究主題として『伝える力』を高める授業の工夫を掲げ、これまでの研究から『伝える力』とは内容構成力と伝達力の2つを指し、それらがバランスよくかみ合うことで相手に『伝える』ことができるということを実感してきている。それら2つの力を育成するために、日頃の授業でのトレーニングはもちろんであるが、学習したことを結びつけるために「プロジェクト型学習」を年に数回行ってきた。「プロジェクト型学習」では4技能の総合的な指導が可能であること、生徒の頭の中で点在している知識を線で結ぶことができること、強い思いやメッセージを伝えることができることなどの利点があげられる。しかし、時間の確保が難しく、「プロジェクト型学習」ごとのスパンが開きすぎてしまい、「プロジェクト型学習」同士のかかわりが薄くなってしまふ。そこで今年度、毎Unitごとまとめの活動として聞いたり、読んだりして得た情報や自分の考えなどを書いてまとめ、それを話したり、読みあったりする活動を取り入れた。この活動の利点として、outputの活動を日常化することができ、短いスパンでその活動を行うことで、前に行った活動の反省が活き、学習事項のかかわりがうまれると考えられる。さらにこの活動の積み重ねを、「プロジェクト型学習」につなげていきたいと考えている。

今回の授業ではUnit3 Sister in Nepalのまとめとして、前時に教科書で得たミーナに関する情報をまとめ、本

時ではミーナに対しての思いを手紙という形式で書き、お互いに読み合う活動を仕組むことを考えている。

3. その手だてとして

本時の目標

- ミーナの生活やネパールについてのやりとりを通して、手紙の内容のイメージをふくらますことができる。
- イメージをもとに、ミーナに自分の思い等をおりませた手紙を書くことができる。

上記の目標を達成するために

Pre-writingの活動として、手紙の内容をふくらますためにQ&Aを行う。内容は

- ・教科書から読み取ったミーナに関すること（年齢、住んでいるところ、おかれている状況）
- ・ミーナの生活と自分の生活との比較（9歳のころ好きだったこと、家での手伝いについて）
- ・ミーナにどんな学校生活を過ごして欲しいか。

以上のやり取りを通して、手紙の内容のイメージをふくらませ、自分の思いを手紙という形式にして書かせたいと考える。

4. 展開例

Procedure & Time	Students' Activities	Teacher's Activities & Help	Remarks
Greeting Small talk (2min.)	Hello, Ms. Kuwahata. I'm (fine, great, pretty good, not bad).	Hello, everyone. How are you, this afternoon?	・元気に素早く反応しているか
Basic skill training (帯プログラム) (3min.)	Dictation Practice ア) 教師の音読を注意深く聞き、書き取りを行う。 イ) 書き取りの後に、教師の範読について一斉に音読をする。	Dictation Practice ア) 科書Unit 10をはじめから音読みし、途中で読むのを止め、最後に読んだ英文を書き取らせる。 イ) を範読する。	・文を書き取ろうとしているか。 ・語らしい発音で音読しているか
Pre-writing (15min.)	①課題を聞く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;">ミーナに手紙を書こう！</div> ②教師の質問に文、または単語で答える。 ・問に対して単語、または日本語で答える。 ・だち同士で意見を交換する。	①課題の提示を行う。 ②ミーナに関する質問を行う。 Step1: ミーナってどんな女の子? 質問例 ・How old is Meena? ・Where does she live? ・What does she have to do in the morning? Step2: ミーナの生活から思うことは? 質問例 ・How did you feel when you know about Meena's life? ・What did you like to do when you were nine? ・Do you have any housework? What is it? Do you have to do that? (水道普及率についてふれる) ・Now Meena can go to school.	・補助質問を用意しておく。

	③ 教師の音読を聞く ④ 質問に答え、内容を確認する。	What do you want Meena to do at school? * 友だち同士で話し合わせる。 * ③ モデルを提示する。モデルを音読する。(2回) ④ モデルの内容を確認する。	
Writing (15min.)	ミーナに手紙を書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">課題：ミーナに手紙を書こう! 書く量：3~6文 書く時間：10分間</div>	ミーナに手紙をかくよう指示を出す。	・活動が停滞している生徒への支援を行う。
Post writing (6min.)	① ペアでお互いの手紙を交換して、読み、サインをしよう。 ② ①の活動を繰り返して行う。	① ペアになってお互いの手紙を読みあうよう指示をする。 ② ①の活動を繰り返して行うように指示を出す。	・机間支援を行う。 ・モニタリングし、注意点がある場合には活動をとめてfeedbackを行う。
Consolidation (min.)	① 何人か手紙を音読する。 ② ワークシートに手紙を書いた感想などを記入する。 ③ 教師のコメントを聞く。	① ボランティアを募って、手紙を音読するように指示を出す。 ② ワークシートに手紙を書いた感想などを記入するよう指示を出す。 ③ 活動に関して、feedbackを行う。	・Positive feedbackを心がける。
Greeting	Good bye, Ms. Kuwahata.	Good bye, everyone.	・元気よく

実践2 事後報告会より

1. 単元名

Let's talk about winter vacation.

(NEW HORIZON English Course Unit 11の発展学習)

2. 本単元のねらい

この単元では言語材料として過去形(規則動詞・不規則動詞)を学習する。過去時制を学習することによって、生徒たちの表現の幅がぐんと広がる。昨日のことや週末のことなどこれまでは表現することができなかつたことができるようになり、英語での表現活動に対する意欲の高まりが期待できると考える。そこで、今回は冬休みの生活について、ALTに伝えるという場面を設定した。こういった自由度の高い課題を行うときに、語彙の問題や、生徒の「書きたいこと」と「書けること」のギャップがうまれて来ることが予想される。それらの問題に対して、帯プログラムでBINGOを使って語彙の導入を行ったり、生徒のつまづきを予想した段階的な指導を考えたりとALTに冬休みの生活を伝えるというゴールに向かって、綿密な指導計画を考えていきたいと考えている。また、本単元では冬休みにしたことをただ書いて伝えられることができればいいのではなく、1つの文章から関連させる文章をさらに付け加えていき、聞いている相手がよりその内容がわかったり、楽しいと思えたりする内容のものにしていきたいと考える。そのために、帯プログラムでPlus one Q&Aを通して、新たな情報を付け加えながら問答するトレーニングを行っている。そして、生徒自身がただ行ったことが書いてある英文より、文と文に関連性がある英文の方が聞いたり、読んだりして楽しいと思えるように、モデルを提示して、気づきを促していきたいと考えている。

本授業では生徒に課題を提示し、冬休みにしたことを5文以上書く。そして、どんな英文がより相手に内容が伝

わりやすいということを感じさせていく場面を仕組んでいきたいと考えている。

3. その手だてとして

本時のねらい

○Did you～?の形を使ってPlus One Q&Aができる。

○過去形を使って冬休みにしたことについて5文以上の英文を作ることができる。

○2つのモデル文を比べ、文章構成の違いに気づくことができる。

上記の目標を達成するために

- ・帯プログラムで生徒が冬休みにしたことをかく際に必要となるであろう語彙をBINGOで耕しておく。
- ・Pre-activityとして生徒にとってBrain Stormingになるように冬休みについてのQ&Aを行い、やりとりをしながら生徒の考えを引き出す。
- ・Post-activityとして時系列で冬休みにしたことを羅列してある英文と、文と文に関連性がある英文とを比較させる。

4. 展開例

指導過程	学習内容および生徒の活動	教師の指導・指示・および援助	留意点
Greeting & Small talk (2分)	Hello, Mr. Takasugi. I'm fine, thank you. And you? ・教師の質問に答える。	Hello, everyone. How are you this afternoon? I'm fine too, thank you. ・天気、曜日、日付などについて質問する。	・元気に反応しているか。 ・素早く反応しているか。
Basic Skill Training 帯プログラム (10分)	【BINGO (帯プログラム①)】 ①教師の後について単語を読む。 ②隣の人と競う。1列そろったらビンゴ。 ③ビンゴになってもチェックし続ける。 【Plus One Q&A (帯プログラム②)】 ・前時までに学習したDid you～?を用いてお互いに質問しあう。 (例) ア) 質問する前に自分について述べる。 Q : <u>I didn't watch TV last night.</u> Did you watch TV last night? イ) 答えにひとこと付け加える。 A : Yes, I did. <u>I watched SMAP×SMAP last night.</u> ※波線がPlus One	①単語の読みを確認する。 ②1つの単語につき2回ずつ読む。 ・机間巡視をしながら観察、支援をする。	・素早く切りかえ、聞こうとしているか。 ・①つながり言葉 ②姿勢、視線 ③答え方を意識しているか。
Activity (36分)	【Pre-activity (8分)】 ・これから行う活動の目標と内容を理解する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">目標：冬休みにしたことをChris先生に伝える。 内容：自分が冬休みにしたことを文にして発表する。</div> ・冬休みにしたことをリストアップする。	・活動の目標と内容を説明する。 ・冬休みにしたことをリストアップするよう指示する。	・注意深く聞いているか。 ・

	<p>【Writing (8分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過去形を使って、冬休みにしたことを書いていく。 <p>【Self-Check& Practice (6分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・書いた文のセルフチェックを行う。 <p>【Reading (8分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・隣の人とペアになり、発表し合う。 ・指名された生徒は発表する。 <p>【Post-activity (6分)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2つのモデル文を見て、気がついたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リストアップしたものをもとに、過去形を使って5文以上書くように指示する。 ・机間巡視をしながら支援する。 ・セルフチェックのポイントを説明する。 ア) 過去形が使われているかどうか。 (動詞を正確に変化させられているか。) イ) 声に出して読むことができるか。 (読めない語句はないか。) ・机間巡視をしながら支援する。 ・隣りの人に読んで聞かせるよう指示する。 ・終わったら1つ席をずらして発表するよう指示する。(以降、時間を見ながらくり返し) ・何人かの生徒を指名し、発表させる。 ・2つのモデル文を提示する。 ・文と文の関連性を意識して原稿を作っていくこと確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ビンゴ、教科書の語彙を参考にする。 ・過去形がしっかりと使えているか。 ・注意深く聞いているか。 ・自信をもって読めているか。 ・相手の顔を見ているか。 ・声の大きさは十分か。 ・注意深く聞いているか。
<p>Consolidation & Greeting (2分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を振り返り、次回の課題をつかむ。 <p>Good bye, Mr. Takasugi. Thank you. You,too!</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を振り返り、次回の課題を確認する。 <p>Good bye, everyone. Have a good weekend!</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・元気に素早く反応しているか。

8 本年度の研究のまとめ

『伝える力』を高める指導の工夫」というテーマで教科の研究を始めて、今年度は5年目となる。研究の切り口となる副題に「伝えることへのレディネスづくりを意識して」を掲げ、課題に向かうために必要となる“知識・技能面のレディネス”と“心理面（気持ちの面）でのレディネス”の2つを生徒の内面にいかに形成していくかを中心に、今年度は研究に取り組んだ。前者は主に帯プログラムの活用で、後者は「話す」「書く」という伝える場面に至るまでに「聞く」「読む」などの技能と絡めてゴールまでの道筋をつけていく学習過程を工夫することで、目的に迫るべく実践を試みた。以下にその成果と課題をまとめてみたい。

まず帯プログラムについてであるが、これは毎時の授業に設定し、トレーニングや反復練習、継続的な活動を通して表現するための基礎・基本を培うことを目指すものである。今年度、各学年で取り組んだ帯プログラムとその活動を行う目的は、以下に示すとおりである。

学年	帯プログラム活動とその主な目的
1	○BINGO : 教科書だけにとどまらず、自己表現活動等に役立つ語彙を幅広く習得する。 ○プラス1Q&A : 常に新たな情報を付け加える習慣づけを図り、聞き返しや会話をつなぐ言葉・表現などを習得することを通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。
2	○音読と基本本文の書き取り：教科書を中心とした学習事項の定着を図る。
3	○Dictation : 基礎・基本の定着を図る。 ○弾丸INPUT : 文法事項や語彙の習得を目指す。

いずれも意義のある活動であり、ねらいも明確であるが、各教師がそれぞれの持ち味を生かして学年ごとに進めているため、3年間の系統性を持たせるまでには至っていない。そこで、各学年の適切な時機に適切な帯プログラム活動を位置づけ、それが本校英語科が目指す『伝える力』の基礎・基本となるように、言い換えれば、生徒にとっての“知識・技能面のレディネス”となるように、帯プログラム活動の年間計画を系統立てて整備していきたいと考える。その際、大切にしたい視点は、1年間あるいは3年間を通して繰り返し活動できたり、生徒が家庭でも取り組むことができるものを、時機と目的を見はからって位置づけていくことである。

また、生徒の声も年間計画を整備するためには欠かすことができない。なぜなら、表現活動をする上で、あるいは英語学習を進める上で、実際に行ってきたさまざまな帯プログラム活動がどんな場面でどのように役立ったと生徒自身が感じているのかを教師はきちんと把握し、それを年間計画や実際の指導に生かしていかなければ、指導する側の願いや思いばかりが空回りすることにもなりかねないからである。生徒に実施したアンケート結果も踏まえて、3年間の系統性を持たせた年間計画の整備に着手することが来年度に向けての課題となろう。

さて、もう一つの研究の柱である“心理面（気持ちの面）のレディネス”づくりについては、公開研究会の授業提案においてある程度の成果を見て取ることができた。授業では『ミーナに手紙を書く』という「書くこと」で自分の思いを伝える課題を設定し、そのゴールに至る学習過程にQ&Aを取り入れることで、ミーナの置かれた状況をより深く理解することにつながった。と同時に、教師と生徒とのそのやりとりは、手紙を書くにあたってのヒントや情報を得るためのブレンストーミングの役割を果たし、生徒は「自分にも書けそうだ」、「こんなことを織り交ぜながら手紙を書けばいいのかな」といった思いを持って、すなわち、“心理面（気持ちの面）でのレディネス”を形成した状態で課題に取り組むことができたのである。何も書くことができないという生徒がいなかったことや、「ミーナに対して3文以上で手紙を書こう」という課題を全員が達成できたことから、この学習過程の工夫（ミーナについてのQ&A活動）は、生徒が安心して課題に取り組み、一つのモデルとして困ったときのよりどころになるものであったと考えられる。

しかし、今回のようなQ&A活動が、すべての学年において有効であるとは限らない。3年生という使える言語材料や語彙数も豊富な学年であるからこそ、うまく機能したとも言うことができる。設定した課題やその目的に見合った効果的なpre-activityを学年や学習段階に応じて工夫していくことがさらなる課題である。

9 参考文献等

- 「自己表現活動」を取り入れた英語授業 田中武夫・田中知聡 著（大修館書店）
- すぐれた英語授業実践 樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸（大修館書店）
- 英語教育10月号 Vol. 57（大修館書店）
- 中学校 新学習指導要領の展開 外国語科英語編 平田和人 編著（明治図書）
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校平成20年度研究紀要